

# 院政・鎌倉時代に於ける「類同・例示」等の 表現法「如し」と「やうなり」について

佐々木 峻

## 目次

### はじめに

- 一、法華百座聞書抄について
- 二、三教指帰注について
- 三、光言句義釈聴集記について
- 四、高山寺本古往来について
- 五、古本説話集について  
おわりに

### はじめに

現代語に於いては、「類同・類似」、「例示・状態」の表現法に、多く、「このようだ。」の言いかたをする。また、文章語としては、「この如くである。」とも言う。

これら二様の表現法の成立・展開については、既に先学の論究がある。しかしながら、それらは、平安時代以前が論の主  
題とされ、いわゆる中世以降については、ほとんど論じられることがなかったように見受けられる。

院政・鎌倉時代に於ける「類同・例示」等の表現法「如し」と「やうなり」について

ところで、最近公刊された、院政期書写の新資料『中山法華經寺本三教指帰注』<sup>(2)</sup>には、左の如き例が見られる。

○曲遂様コクスイヤウ 麻アサニ云ウハマカレルヨモキナレトモアサヲノヲヒマシハンヌレハ不トモ扶テ直シ、其ノ様ニ悪人ナレト

モ吉キ共ニマシハンヌレハ善人ト成ル、(十一オ一)

「そのやうに」とある。この「類同」表現は、本文献中の孤例である。かつ、同期以前の文献についても、未だ報告されたことを聞かない。

室町時代まで降れば、この趣の表現法は、さして珍らしくはなくなる。大藏流虎明本狂言の中から、二三の例を拾うならば、左の如くである。

○このやうな見事なくりはあるまひとおもふが。(栗焼 一723 八臨川書店版に拠る。V以下同じ。)

○先身共に談合もせひで、そのやうな事をするものでおじやるか。(八幡の前 二100)

○わたくしが女をほむるではなひが、誠にあのやうなりこんな女は御ざるまひ。(右近左近 二287)

これら、「この」「その」「あの」の指示詞と「やう」との複合した室町時代の「類同・例示」の表現法は、院政・鎌倉時代のそれと、どのように関わり合っているのであろうか。

この問題の解明は将来の課題とし、今は、左の五文献(片仮名交り文を中心とする)に基いて、「如し」と「やうなり」の記述を試みるものとする。

- 一 法隆寺藏法華百座聞書抄院政期書写本
- 二 中山法華經寺藏三教指帰注院政末期書写本
- 三 高山寺藏光言句義釈聽集記正安元年校本
- 四 高山寺藏古往来院政期書写本
- 五 梅沢彦太郎氏藏古本説話集鎌倉中期頃書写本

右の中、一―三が片仮名交り文資料、四が訓点資料、五が平仮名文資料である。一―三も、それぞれ文章の性格を異にする面がある。このことは、以下に記述する「如し」と「やうなり」の状況にも、如実に反映している。

### 一、法華百座聞書抄について

「如し」が漢文訓読特有の語であり、「やうなり」と位相を異にするものであることは、既に知られているとおりである。<sup>(3)</sup>ところで、法華百座聞書抄には、「如し」は、左の1例が認められるに過ぎない。<sup>(4)</sup>

○心経大既如此。<sup>(懸)</sup> (ウ5)

これは、第五番目の講師（未詳。法相宗か）の言として用いられている。

一方、「やうなり」は、慣用的な「かやうに」が、

○ソノ経ハ、カヤウニタ、一品ヲキクニ、アラタナル證マシマス経ナリ。(オ309 講師は香雲房、天台宗)

○「修撰其心」ト申ハ、カヤフニヲホシヌルヘキニヤ候ラム。(オ361 講師は実教房、天台宗)

○功德モカヤウニ眼・耳・鼻・舌・身・意ノ六根ノクシテソナハルコト、コノロヘサセタマフヘキナリ。

(ウ199 講師は善法房、天台宗)

の3例認められる。また、一般的な「しやうに」は、左の1例のみである。

○一恒河沙トハ、ヒロサ冊里ナカサ冊里ノ恒河クノシタナルスナコノ、コノニハナルスナコトハカレニクラフレハ、大ハン石ノヤウニナムアルヘキ。(オ378 講師は覚登、法相宗)

法華百座聞書抄は、10名の講師が、交替で説経に携った、講説の聞書である。右の「如し」「やうなり」の計5例については、10名中5名が、各一回使用し、

如し……法相宗カ(1名)

院政・鎌倉時代に於ける「類同・例示」等の表現法「如し」と「やうなり」について

やうなり……天台宗(3名)・法相宗(1名)

と、「やうなり」は、天台僧に偏っていることがわかる。これら香雲房・実教房・善法房の天台僧、及び、法相宗の覚誉は、10名の値の中でも、中世語を多用することの顕著な人たちであった。<sup>(5)</sup>「やうなり」使用と中世語使用との間に、一脈通じるものがあるのではなからうか。

なお、右の「如し」「やうなり」のいずれも、説経の場面に限られており、説話の場面には使用されていない。<sup>(6)</sup>この点は、後述の三教指帰注の場合とは隔たるものがある。

次に、五文献中での使用頻度では、本文献が最少である。三教指帰注がこれにつき、他三文献と、使用頻度に関して一線を劃している。他三文献といえども、例えば、平家物語に比べると、やや劣るとされる。<sup>(7)</sup>

## 二、三教指帰注について

慣用的な「かくの如し」が7例あり、一般的な「く如し」は、1例も見られない。

三教指帰注の文章は、大別して、被注語句及び注釈文から成る注釈場面と、注釈に関連して展開せられる説話場面との二から成っている。

注釈場面でのものは、次の4例である。

○謝(ト)云(フ)ハ如<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>龜毛先生<sup>者</sup>書<sup>ニ</sup>アラスト云(フ)意也。(十三オ七)

○日本国ノ藍染ノヤウモ如<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>。(十九オ二)

○其(レ)故ハ三孝指帰ヲ作ラム故ニ如<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>一名ヲ立(テ)タリ。(六オ六)

○非(ト)云(フ)ハ如<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>ノ物ニ非スト云(フ)卑下ノ詞也。(十三ウ八)

連用形・終止形が各1例、連体形が2例である。連体形の2例については、「如」字に送仮名が存せず、「如き」であるか

「如きノ」であるかは、確証が得られない。後述の光言句義釈聴集記や古往来には「如きノ」とある例も散見し、平家物語で、

○八月廿日相模国土肥へ越テ時政宗遠実平如キノヲトナ共ヲ召テサテ此上ハイカ、有ヘキト評定アリ。(延慶本二末五十二ウ 山田孝雄博士『平家物語の語法』408頁 同博士によれば、「カクノコトキラノ池ハ」(五本六オ)の例の御指摘もある。)  
覚一本では、

○土産<sup>とさんちりれう</sup>糧料<sup>りょうりょう</sup>ごときの物<sup>もの</sup>をもこひ給<sup>たま</sup>へかし。(日本古典文学大系本上361頁)

○土産<sup>とさんちりれう</sup>糧料<sup>りょうりょう</sup>ごときの物<sup>もの</sup>も大切<sup>たいせつ</sup>に候。(同右上362頁)

とあり、すべて「如きノ」とある。「如き」と「如きの」、「如きの」と「如くなる」との関係については、今後追究さるべき問題がある。

説話場面に用いられたものは、次の3例である。

○如<sup>レ</sup>シ是<sup>レ</sup>高名<sup>たかな</sup>シテツマラスシテ齊国<sup>せいこく</sup>ニカヘリ了<sup>ま</sup>。(九オ8)

○王ノ合戦シタマフモ如<sup>シ</sup>是<sup>レ</sup>ハカナシ。(二十九オ1)

○依テ迦葉<sup>あせ</sup>仏<sup>ぶつ</sup>の時<sup>とき</sup>ヨリ在<sup>レ</sup>世<sup>よ</sup>ニ如<sup>シ</sup>是<sup>レ</sup>。(二十八オ3)

右の後2例は、会話文中のものである。使用頻度及び連用形・連体形の見られる点では、法華百座聞書抄に比べて用法は広いが、右7例が、いずれも「かくの〜」と慣用的な表現法である点、後述の光言句義釈聴集記や古往来に比べて、用法は狭いと言ふべきである。なお「如くなり」は皆無である。

「やうなり」は4例ある。(うち、「そのやうニ」は、六六頁に既掲。)

○カヤウニ目出<sup>めで</sup>多<sup>おほ</sup>キモノヲ本国<sup>ほんこく</sup>ニ候<sup>ま</sup>う父母<sup>ふぼ</sup>ニクワセスシテタヘ候<sup>ま</sup>ハ泣<sup>な</sup>候<sup>ま</sup>也。(八ウ4)

○本国<sup>ほんこく</sup>ニテモカヤウニヌスヒトナルカ。(九オ5)

と、慣用的な「かやうニ」が2例、一般的なものとしては、左の1例が見られるのみ。

○鑽燧(燧)ト云ラハ学文スルニハヒヨキルヒキリノヤウニイソキスヘキ也。(三ウ1)

4例ともに連用形「〜ニ」とあり、用法が偏っている。(会話文の例は、八ウ4・九オ5の2例。)

### 三、光言句義釈聽集記について

「如し・やうなり」共に多形である。また、「如きなり」も認められる。

まず、「如し」の中、慣用的な「かくの如し」を見る。

○是等ヲ如ク此一書スル事ハ此ノ御中ニハカナハセ給マシキナリ。(下130)

など、連用形が過半数の19例を占め、うち文頭に立つ、

○如ニ此一ノ委ク義ヲ云ハサラムニハシ也。(上108)

の如き例が4例ある。

終止形(4例)の一例は、

○仏ノ形木等モ即チ如ニ此一。(上122)

である。

連体形「如き」は左の1例のみ(文頭)。

○如キ此一ノ事ライエハ顯宗骨ト云シハテニハ大日経ノ疏ヲモ一行ハ天台宗ノ人ナレハ用意スヘシト云トカヤ云々。(上535)

「如キノ」は、

○アマリ初心ニハ如キ此一ノ事ヲハケニモ聞クマシキ事也。(上456)

と、非文頭が3例、

○如<sup>ニ</sup>キ<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>法<sup>ニ</sup>ソヒテ信<sup>ヲ</sup>起<sup>シ</sup>智<sup>ヲ</sup>起<sup>ス</sup>ニカ、ル学<sup>聞</sup>座<sup>席</sup>ハヒソメキテヤム。(下116)  
など、文頭に立つ例が5例を占め、他の活用形に比べて異色である。なお、先掲「如<sup>ニ</sup>キ<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>」(上535)の例について、「ノ」を補読する余地もなくはない。

一般的な「<sup>レ</sup>如し」が、次下のように多数認められることは、既述二文献に比べて、著しい隔りを思わせる。

「<sup>レ</sup>如し」は、「<sup>レ</sup>ノ如し」と「<sup>レ</sup>ガ如し」とに大別される。

1 「<sup>レ</sup>ノ如し」

「ノ」の上接語は、すべて体言である。「ガ」の上接語が、すべて活用語の連体形であるのと対立的である。<sup>(8)</sup>

本文献に於ける「<sup>レ</sup>ノ如し」には、終止形と連体形しか認められない。終止形は5例あり、その一例を左に掲げる。

○答、草木等ニ向テ此ノ真言ヲ誦シカクル時キ、其ノ草木全骸皆ヲ真言トナル也、加持ノ義ハ上ノ如シ。(上375)  
ところで、「如し」を全仮名表記したものが1例ある。

○一切法不生ト云ハ仮名カキノ物ノコトシ。(下永10)

正安元年校本の下巻巻首の欠落箇所を、江戸中期書写の永弁本<sup>(9)</sup>で補った部分にこれが見られる。(永弁本79行中に見られる「如し」は9例。)

因みに、法華百座聞書抄では、全例とも仮名表記、三教指帰注では、全例とも漢字表記、古往来では、附訓例1を除き他は漢字表記<sup>(10)</sup>となっており、表記態度にそれぞれ一貫性を認めることができる。以上の点からすれば、右の永弁本の表記態度は、正安本のそれとは別と見るべきものではないか。(もとより、表記論的立言は、広汎な調査結果に基づくべきものであろうけれども)

次に、連体形は2例あって、いずれも、「如きノ」とある。一例は、

○若<sup>シ</sup>上ノ如<sup>キ</sup>ノ義一ツモカケハ米ノ種ナレトモクサリタラムカ如<sup>シ</sup>云。(下180)

院政・鎌倉時代に於ける「類同・例示」等の表現法「如し」と「やうなり」について

である。

他の1例は、

○凡ハ物ノ<sup>レ</sup>積ハ其ノ<sup>レ</sup>経宗キマカスレハ、深キ事モアレハタ、シカノ<sup>レ</sup>如キノ<sup>レ</sup>事トモハ解脱御房モホツくト仰セラル、事トモハサモアルラム。(上419)

と、「カノ」を承ける例である。右を「かの如し」の例と見るならば、五文献中唯一の用法として、注目に値する。但し、右を、「ただ(唯)、しかの如キノ」と見るならば、これは「しかの如し」の例となる。「しかの如し」ならば、古往来に1例認められる。

なお、終止形「しノ如シ」で文頭に立つものが1例ある。(他文献には皆無。)

○法身ヲ約スレハモトヨリ以<sup>リ</sup>来<sup>カ</sup>タ<sup>カ</sup>仏ト同躰也<sup>ト</sup>如<sup>シ</sup>。(上197)

割注に見られるもので、本文を直接承けた特殊用法とされよう。

## 2 「いが如し」

「が如し」は、すべて活用語の連体形を承けている。連用形「如ク」は2例、うち1例は、「如クシテ」とある。

○答、ウトヲトハ仰月ト空点トノナカヨクテ合セラル、カ如クウトモフトモ随躰ニヨマル、也<sup>云々</sup>。(下永44)

○此ノ蓮花ノケカレサルカ如クシテアルカト思テ是ヲ愛スルニ仏界ニ蓮花ヲ生ス。(上188)

終止形が大多数を占め、18例を数える。

○サレハ皆ナ我躰アラハレス、タ、索<sup>ツナ</sup>ヲツケテ物ニヒカレアリクカ如シ。(上182)

○天<sup>姓</sup>ヲウケヌモノハ、イカニヨキ人ノ申ス事ヲ聞トモ如法ヤセカレタラムモノ、飯<sup>モク</sup>ハス、キモノモキサラムカ如シ。

(上42)

と、動詞・助動詞を承けるものが主である。形容詞を承けるものは、左の1例のみ。

○平等性智ト云ハ摩尼珠ノ垢ナキカ如シ。(上280)  
連体形「如き」は、左の1例である。

○見六道衆生貧窮無福恵ト云カ如キハ即チ凡夫ハ此ノ平等性智ニ貪。(乎ナルカ故ニ極メテ貪窮也。(上280)  
「かくの如くなり」「く如くなり」も、いくらから見られる。

慣用的な「かくの如くなり」については、未然形・連体形・已然形が、各1例認められ、いずれも、文中に用いられている。各々を左に掲げる。

○若シ実ニ如ク此ノナラスハ虚言ナルハ如何。(下120)

○因明疏ニソ又タ、如クナル此ノ世間ノハノコトハヲヒク云々。(上333)

○……我カ覺ノ前ニハ如ク此ノナレトモ、如夢如幻ノ衆生ノ前ハ如ク此ノナケレハ……。(下135)

一般的な「く如くなり」は4例あり、「ノ」を介して体言を承け、「ガ」を介して連体形を承ける点で、「如し」と等しい。未然形は1例で、「ノ如クナラ」とある。

○タトヒ文殊師利安セストモ如此理ト相応シヌレハ物氣病ノ野于狸ナケレトモ極シテ死ヌルカ如クナラム。(下永24)  
連用形は2例で、「ノ如クニ」「ガ如クニ」の例である。

○物ノ文点ヲ因明ナントノ如クニヨメト云ハムニ、先ツ此ノ梵字ニテモコ、ニya(原文梵字)ノ字ノ無ラムニ向ヒテ為ニナント云字ヲヨミモツクル也。(上337)

○顯宗ノタ、舌ノ端ニ懸タルカ如クニハスヘカラス。(上11)  
連体形は1例で、「ガ如クナル」とある。

○譬ヘハ此ノ真言ヲ誦シタリ説タリシ給フ仏ノオハシマサハ、其躰モ見ユヘキニ、タ、説テ衆生界ヘナカシ出シ給フヲ、仏ノ実ニ説キ給フヲ聞カ如クナル支度ヲハイカ、セムスル、ト云ニ其ノ支度ヲシテ説キ給フナリ。(上315)

以上、「如し」と「如くなり」とについて、両者共存の意味が問われることになる。

小林芳規博士の御研究によれば、「如くに」は漢籍、「如く」は仏書の訓法であり、漢籍でも、藤原南家点では、両方の訓法が認められる由である。<sup>(11)</sup>連体法の、「かくの如き」と「かくの如くなる」とについても、今後、検討する必要がある。

次に、「やうなり」について見る。慣用的な「かやうなり」と共に、一般的「しやうなり」が、計24例見える。「いかやう」の例は見えない。

「かやう」は、連用形「しニ」が1例見える。(法華百座3例、三教指帰注2例、いずれも「しニ」である。)

○シ(乎)ハ(上)ニシ(乎)タ、カヤウニ知リナハ、イトマアリテ遁世ハ誠ニシツカニテ所作アルヘシ。(下125)

一般的「しやうなり」が23例を占め、用法上の幅広さも、「如し」に比肩するものがある。相違点としては、連体形を承ける際、「ガ」を介さないこと、「同じ」を承ける例がいくらか見られること(古本説話集でも同様)などが指摘できる。未然形「やうナラ」が2例ある。ともに、助動詞「む」に続いている。

○モトヨリ土木<sup>ツツキ</sup>ノヤウナラムモノハ、イクラオストモ、カナハシ、一ヲ聞テ十ヲ知ト云ヤウナラムハ、ヤスクソタチヌヘキ也。(上38 39)

連用形「やうニ」が過半数を占める。(13例)

○報恩心ト云テ、其ノ俗、其ノ女房ノ我ニ能クアタリタリシト云テ、其ノ報恩セムトイエハ、アマリ物ヲキリクムヤウニ案スルホトニ、心ニイトマナクテ仏道修行ノサハリトナル也。(上48)

連用形としたもののうち、2例は、「やうニテ」とあるものである。これは、古本説話集にも認められる。光言句義釈聴集記での一例は、左の如くである。

○此ノ心ノ性ハ脇足ハシノ様ニテアルニ非ス、前ノ四誇ヲ離ラテ不思議ニテ有ト云ハ即チ自性清浄心ニテアルナリ。(下167)

終止形は3例ある。一例は、

○海懂比丘ニッカ、ルコトハアル、ア<sup>(平)</sup>ト<sup>(平)</sup>ナ<sup>(平)</sup>ケ<sup>(平)</sup>ナル積ノヤウナリ。(下231)

「同じ」を承ける例もある。

○サレハ我ト云モ人ト云モ五蓋ハ同シ様ナリ。(上241)

連体形は、「同じ」を承けるもの1例のほか3例が認められる。一例は、

○是カヤウナルコトソ、真言ノ義ナルヘシト思テチ、ト如此ニ書セル人ノ用ニ思フ事ハ、我又用モナシ。(上548)

である。右は、「是カ」と、「カ」をとっている。「如し」「如くなり」には見られなかった用法として注目される。

已然形は、左の1例のみ。

○「我法タニ」(永弁本)空ナラハ此ノ功德ヲ得ツヘキラ妄情ノ前ヘハ夢幻<sup>ユツヤホロ</sup>シノヤウナレトモ我法ヲ執シテホツト中ニ生ルレハ十方界

立ス。(下69)

以上、用例数において「如し」にはやや劣るものの、位相を異にする「やうなり」がこのように共存している事実を、どう解すべきなのであろうか。

本文献には、和語に声点の付されたものが、合計45箇所見られる。今、試みに、「如し」「如くなり」と「やうなり」との相関々係を調査してみると、左の如き結果が得られる。

1 声点付和語が「如し」「如くなり」・「やうなり」と同一文中に共存する比率

ア 如し・如くなり……………7.6%

イ やうなり……………20.8%

2 同一文中及び直前直後の一文中に共存する比率

ア ……13.8%

イ ……41.7%

院政・鎌倉時代に於ける「類同・例示」等の表現法「如し」と「やうなり」について

右から、1・2 いずれの場合にも、声点付和語と「やうなり」との共存率が「如し」「如くなり」のその約三倍を占めていることがわかる。

明恵上人関係の聞書資料には、声点付和語がしばしば見出される。それらの和語に共通する性格は、院政・鎌倉時代に於ける口語を反映したものであることが指摘されている。<sup>14)</sup>もとより、「如し」も、築島博士が指摘されたように、<sup>15)</sup>「所謂訓読語」とは言っても、訓読語の中では相当に日常語に近い類であつたと見るべき「ものであることは、先掲アの数値から見ても、首肯されるところである。

なお、「如し」は、割注の中に用いられることもあるが、「やうなり」にはそれがない。このことも、両者の語性の異なりを知る一指標とならう。

「やう」の表記について付言する。

「やう」は、「ヤウ」と仮名表記されるのが一般で、「様」とあるのは2例に過ぎない。(巻下のほぼ中ほど、下18724)この表記態度は、「如し」「如くなり」と、まさに裏はらの関係になる。「如」と「やう」の表記態度の対立を、「如し」と「やうなり」との語性の対立に結びつけるのは、あながち牽強附会の説とも言えないのではあるまいか。

ともあれ、本文献が、「如し」と「やうなり」とを併用する、異色の文献であるという事実は動かない。

「如し」と「やうなり」とが、対立するに終らず、相互交流するものであることは、左の一例によっても理解されよう。

○大智明白ニナリヌレハ虚空界ヲハシリアルクニケ<sub>レ</sub>ツ<sub>レ</sub>マ<sub>上</sub>ツ<sub>レ</sub>ツ<sub>上</sub>ク<sub>レ</sub>ヤウニ我カ覚ノ前ニハ如此ノナレトモ、如夢

如幻ノ衆生ノ前ハ如此ナケレハ……。(下135136)

類例は上548 549にもある。いずれも、「やうなり」が、「かくの如し」という慣用的な表現法と共存しているのが注目される。

#### 四、高山寺本古往来について

高山寺本古往来の「類同・例示」の表現法は、「如し」を基調とするものである。その点、後述の古本説話集と対照的である。但し、「やう」の痕跡も見られなくはない。次の2例の「ことやうなり」がそれである。

○……大文ノ鹿ノ肩拔ノ脊、沢渡ノ左卷ノ藤鞭等、別様ナリト雖(モ)・弊所ニ有ル(者也)。(170)

○件(ノ)別様ノ馬(ヲ)以(テ)、奉(ニ)借(ス)可(シ)。(262)

「ことやう」は、他四文献に見えない語形である。語義上は「同じやう」に対立するものであるが、語構成はまったく別であり、同日には論じられない。

「如し」33例の中、慣用的な「かくの如し」が16例を占める。

連用形はなく、終止形が1例見える。連用形が皆無であるのは、光言句義釈聴集記と大きく隔たる点である。終止形の例は、文章末尾に使用された左のものである。

○速(ヤ)カニ此(ノ)趣(ヲ)以(テ)重(ネ)テ仰(セ)遣(ツ)ス者(レ)ハ、国宣此(ノ)如(シ)、乞(コ)ウ也(之)ヲ悉(マ)クシテ謹言。(41)

連体形は、「かくの如きノ」が15例で、「かくの如きナル」はまったく見られない。

○面(ク)ニ貴(セ)メ陵(レ)シテ、色(ク)ニ微(ハ)リ取(ト)ル、此(ノ)如(キ)ノ苛(カ)法(ハ)之間(ツ)間(ツ)、百姓(ノ)悉(ク)散(シ)、官物(ノ)多(ク)感(感)欠(カ)。(130) などとある。

連用形「かくの如ク」は皆無であったが、「しかの如ク」が1例見られる。

○若(シ)、被物(ノ)之(ニ)用意(イ)、有(ニ)ル可(ク)侍(マ)リシ、然(シ)ノ如(ク)之(ニ)支度(シ)無(ク)ワ、其(ノ)処(ニ)臨(ム)テ、定(メ)テ恥辱(チ)有(ニ)ラ)ム歎。(182)

「しか」の語形は、法華百座や光言句義釈にも見られるが、「如し」と結びついたものは他に例を見ない。これも、注目すべ

き一例とされよう。

次に、一般的な「ゝ如し」を見る。

連用形「如ク」が4例、うち、「ノ如ク」が3例、「ガ如ク」が1例である。

○但(シ)件(ノ)殿〔於〕殿上ニ近ニウシテ君達藏人雲ノ如ク集ハリ来ラムニ然ル可キ処ニ无ニシ。(373)

○若(シ)只今有ニル(之)由ニヲ以テ執(リ)申(サ)ハ、定(メ)テ惜ミ申(ス)カ如ニシ、推量シ給(ハ)被ニム歟。

(236) (特殊な返点符号は、印刷の便宜上これを省いた。以下同じ。)

右の第二例には「如シ」とあるが、文脈からするに、「如く」と見るべきものであろう。

終止形は、「ノ如シ」6例、「ガ如シ」2例である。各々一例を左に掲げる。

○奉君之道、宛モ水鳥ノ如ニシ、敢エテ私ノ費ニヲ思ニラ可(カ)ラ不(103)

○謹言 日来(ノ)(之)問久(シク)奉認(セ)不、鬱望(ノ)(之)至リ、歳月ニヲ送ニルカ如ニシ。(390)

連体形は、「ガ如キ」が2例(ともに、係助詞「は」に続く。)で、「ノ如キ」はない。「如キ」の一例は、

○抑、命ヲ被ルカ如キハ(者)、件(ノ)人ノ其(ノ)近親、当国ニ有ル(之)由云。(58)

である。光言句義釈聴集記の「如キ」は、すべて格助詞「の」に続いて連体格に立つ用法であったのに対して、古往来のは、係助詞「は」に続いて主格に立つ用法である。但し、古往来にも、「かくの如きノ」は多くあったことからすれば、右の相違は、偶然のこととすべきものようである。

「かくの如くなり」は皆無であったが、一般的な「ゝ如くなり」は、連用形「如クニ」が1例認められる。

○縦 鞭ニヲ以テニ箠クカ如ニ(ク)ニ其ノ馬(ヲ)打ツト云ニ(ヲトモ)、動キ走ル可(カ)ラ不。(265)

なお、「如キンバ」というのが、ただ1例ではあるが、左例の如くに用いられている。

○須ラク先ツ命ノ聞エノ如キンバ、事ノ由ヲ〔於〕非違ノ別当殿ニ申シ、并(ヒ)ニ官人等ニ触(ズ)示シテ、謹(ム)テ

糺ニシ申 令ム須 ヴ〔也〕。(88)

他四文献にはまったく見られぬ、貴重な一例とされる。

### 五、古本説話集について

平仮名文資料ではあるが、以上四文献の特徴を浮き彫りにするために、古本説話集の状況についても概観しておく。

本文献の「類同・例示」の表現法が「やうなり」を基調とするものであることは、多く言うまでもない。中で、「如し」が1例見られる。

○鷹司殿上、大殿の上もみなまいり給へり。かくのごとく四五日がほど、こそりてまいり集うほどに、聖の夢に、この牛いふやう……。 (二六九③)

五文献のいずれにも見られる、慣用的な「かくの如し」である。

他はすべて「やうなり」である。

まず、慣用的な「かやうなり」では、連用形「かやうに」が5例、その一例は、

○初つ方は、かやうに心ざしもなき様に見えたれど……。 (三六④)  
である。

連体形「かやうなる」はなく、連体法はすべて「かやうノ」である。三教指帰注・光言句義釈・古往来での、「かくの如きノ」に対応する表現法と見ることができそうである。左に一例を掲げておく。

○「この人くはかやうのわざすこしす」ときこしめしたるにやあらん……。 (二〇④)  
〔「かやうノ」は、他四文献には皆無。〕

「かやう」に続く慣用的なものとして、他に、「さやう」と「いかやう」とがある。

院政・鎌倉時代に於ける「類同・例示」等の表現法「如し」と「やうなり」について

「みやう」では、「みやうニ(テ)」が2例、「みやうノ」が3例ある。  
 「いかやう」では、「いかやうニ(テ)」が3例ある。

右のいずれも、他四文献には存しない。本文の「やうなり」(尤も、終止形は皆無であるが)の用法の幅広さを物語っている。

次に、一般的な「やうなり」について略述する。

体言を承けるものは、すべて「ノやう」とあって、「ノガやう」とあるものはない。

連用形「ノノやうニ」が13例(五八⑤ほか)、連体形「ノノやうナル」が3例(二三二③ほか)である。

活用語の連体形を承けるものも少なくない。(18例)これらが「ノ」も「ガ」もとらぬことは、光言句義釈聴集記の場合に等しい。これらはすべて「ノやうニ」と、連用形である。(二九八③ほか)

「同じ」を承ける例は、光言句義釈に比べて遥かに多い。「同じやうニ」が9例―二二二③ほか、「同じやうナル」が1例―一七四⑤。後者は、光言句義釈聴集記になし。

特殊な用法として、格助詞「と」を承けるものが1例見られる。

○……殿(との)、……と仰せ(おほ)られければ、……とやうに、いみじく逃れ申(し給へ)せど……。(二三三⑤)

以上を通じて、一般的な「ノやう」に於いて、終止形「ノやうナリ」が1例も見えないことは、「やう」を基調とする本文に於いて聊か奇異な感じがしないでもない。(光言句義釈には3例あった。「如し」「如くなり」と「やうなり」とを、単に対立するものとして把握することが当期の文献にあっては実情に合わないものであることは既に述べた。更に微視を進めれば、活用形(用法)ごとの比較検討が要請される。

院政・鎌倉時代の「類同・例示」の表現法は、文献により、「如し」「如くなり」に偏するもの、「やうなり」に偏するもの、両者を共有するもの等、単純一様でないことの一端は明らかにし得たかと思う。それでも、三教指帰注に見られた「そのやうに」は、当期にあつて異色を放つ一例であることは確かである。恐らく、「かやう」から「このやう」、「さやう」から「そのやう」、「いかやう」から「どのやう」が生まれてくる（或いは交替する）国語史上での歩みは、複雑なものがあつたらうと推測する。

「かく（かう）」と「かくの如く（に）」・「かやうに」とも、表現論的には、深く関わり合うものであろう（因みに、「かく（かう）」は、五文献中、高山寺本古往来のみ不存。）

以上のことは、すべて継続課題として、次稿に委ねたいと考える。

注

- (1) 山田孝雄博士『漢文の訓読によりて伝へられたる語法』（昭和十年五月 宝文館）
- 堀田要治氏「如シと様ナリとから見た今昔物語集の文章」『国語と国文学』18ノ10 昭和十六年十月
- 宮田和一郎氏「古典文学とその用語」『古典文学』196
- 築島裕博士『平安時代の漢文訓読語につきての研究』（昭和三十八年三月 東京大学出版会）
- 大坪併治博士「訓点語における『ごとし』の用法」『訓点語と訓点資料』28 昭和三十九年四月
- (2) 築島裕博士編『中山法華三教指帰注総索引及び研究』（昭和五十五年八月 武蔵野書院）
- (3) 注1諸論文並びに、築島裕博士『平安時代語新論』（昭和四十四年六月 東京大学出版会）
- (4) 注3に同じ。
- (5) 小林芳規博士「国語史研究資料としての法華百座聞書抄」『法華百座聞書抄総索引』所収 昭和五十年三月 武蔵野書院
- (6) 説経場面と説話場面との用語の相違については、注5引用書研究篇所収の、来田隆氏論文及び拙稿参照。

院政・鎌倉時代に於ける「類同・例示」等の表現法「如し」と「やうなり」について

- (7) 金田一春彦博士他編『平家物語総索引』(昭和四十八年四月 学習研究社)で調査すると、「如し」151例、「如くなり」36例、「やうなり」110例を数える。
- (8) 春日政治博士『西大寺本金光明最勝王經古点の国語学的研究』(昭和四十四年九月復刊の勉強社版に拠る)。
- (9) 『光言句義釈聴集記』本文凡例(小林芳規博士執筆) 参照。
- (10) 小林芳規博士「国語史料としての高山寺本古往来」(高山寺資料叢書二『高山寺本古往来 表白集』所収 昭和五十年三月 東京大学出版会)
- (11) 小林芳規博士『平安鎌倉漢籍訓読の国語史的研究』(昭和四十二年三月 東京大学出版会)
- (12) この「イクラ」も、この用法としては、古例として注目に値する。
- (13) 金子彰氏の調査に拠る。『光言句義釈聴集記』補註
- (14) 小林芳規博士『中世片仮名文の国語史的研究』(広島大学文学部紀要30特輯号3 昭和四十六年三月)
- (15) 注1所引の築島博士の御著書87頁参照。
- (16) 山内洋一郎氏編『古本説話集総索引』(昭和四十四年四月 風間書房)に拠る。以下同じ。

〔後記〕 本稿の作成に当っては、終始、小林芳規先生の御指導とお励ましとを賜った。記して深謝申しあげる次第である。